論　文

文化財活用による観光まちづくりに関する考察
―中国の観光都市青島市瑯琊台文化財を事例にして―

鈴木　晶*　王　軍**

Consideration about Sightseeing Community Building by Utilization of a Cultural Asset: A Case of the Langya Stand Cultural Asset in the Chinese Tourist City Qingdao

Shou SUZUKI*　Jun WANG**

【要　旨】

青島には文化資源が多いが、観光資源としての開発がまだ十分ではないのが現状である。紀元前220年ごろ秦の始皇帝[1]が徐福[2]を東の「嬴洲」という仙人が住んでいる島に、「不老不死の薬」を取りに行かせたという記録がある。さらに徐福の日本への出発場所が青島の近くの琅琊台であった。本論文はこれまでこの歴史文化資源の活用及び観光開発に関する資料などを調べ、さらに青島市の瑯琊台文化開発をめぐって、青島市の歴史文化資源の活用による観光文化都市建設への可能性及び現存問題点を考察した。

【キーワード】

文化財　徐福　瑯琊台　観光文化都市

1．はじめに

現代社会において経済と文化は、明確に分離できなくなり、経済の文化化、文化の経済化への現象はすでに、世界各地では現代の発展のパターンとなっている。第11回目となる共産党代表大会[3]では、中国・青島市は「文化は都市の魂であり、都市としての重要な競争力である。青島には文化資源が多く、潜在的な力があるため今後、文化の流行動向が牽引力を発揮し、国民の教育、社会への貢献、経済の発展の分野で役立ち、文化的な発想及び文化の力で視野を広げ、高レベルの発進で力強く文化の改革を進め、青島を文化センスがあり、文化の要素が多く、文化事業の繁栄、文化産業を発達させ、青島を現代海浜文化がある有名都市を目指すように頑張る」という内容が報告書で明確に記載された。さらに、「青い色文化を青島市の特色として全面的にアピールし、現代化海洋観光文化名城を目指して都市の建設を継続する」との文言も数回に渡り強調した。今後、青島市を文化都市青島市とすることが市政府の主な方針となっている。

*別府大学短期大学部　**中国青島理工大学客員教授

これを受けて、青島市の政府はすでに『青島市青い色経済発展企画案』を発表した。青島市にとって今後、この案を実現するため、青い文化に関連する様々な事業の推進と開発が急務となっている。ただ、海洋文化として青島にとっては無視できないのが徐福に関連することである。「徐福東渡」と言葉は、中国人によく知られていることであるが、紀元前220年ごろ秦の始皇帝が徐福を東の「嬴洲」という仙人が住んでいる島に、「不老不死の薬」を取りに行かせたという話である。そのため、徐福は青島と深い関係があり、徐福の日本への出発場所が青島の近くの琅琊台であったからだ。古代では、徐福の東海への出航地が中国にとって外海への出発地であり、海外への交流のスタート地でもある。秦と漢の時代にとって海洋文明の代表地でもあった。海洋文化名城を目指している青島市にとって、琅琊台及び琅琊文化を生かした開発こそ、新しい歴史文化の観光資源となる。

２．中国の有名観光都市–青島

青島は山あり、海ありで、景色は美しく冬暖かく夏涼しく、気候は穏やかで心地良い都市である。国レベルの歴史文化都市でもあり、第一級の中国の優れた観光都市、第一次の中国文明都市の表彰を受け、2008年北京オリンピックのヨット・レース開催都市として重要な役割を果たした。旧市街区域のドイ総督府旧跡、中山路劈柴院、青島ビール博物館、赤ワイン博物館、ドイツ風情街には多くの観光客で賑わう名所でもある。

“赤い瓦と緑の木、碧い海と青い空”の旧市街区域、東部の近代化した新市街区域はコントラストのある輝きを保っている。市街区域の東西に走っている海辺遊歩道、将桟橋、小青島、小魚山、海底世界、第一海水浴場、八大関風景区、五四広場、オリンピックヨットセンター、銀海遊覧船クラブ、極地海洋世界、石老人海水浴場など主要な観光スポットも連なっている。中でも、青島管轄区域内は国家級の澇山名勝区、海辺景区等の観光地区があり、八大関建築群は“万国建築物博覧”と言われている。

また、青島郊外地区の自然生態の景観や人文の景観、名所旧跡も多彩である。長い年月にわたる名所琅琊台、古台観月、竜湾湧浪も見られる。秦の始皇帝は、三回東臨を楽しんでいるが、帰ることを忘れたほどの景観で、徐福はここから日本へ出航した。田横島の上には前漢時代の５百義士集団が埋葬され、称賛と感動に値する史跡で、国家級の自然保護区の馬山の石林と春秋戦国齊長城遺跡などは中国人に褒め称えられている。

青島港への旅客輸送は、水路から青島に入る主要な通路の一つで、航行する国内の多数の港町と日本の下関の３本国際定期航路、青島～韓国インチョン、韓国群山が開通している。ここ数年来、青島では次々と開発が進み、新しい名所を作り上げている。例えば大空城、鳳凰島リゾート地、唐島湾海浜公園、開発区野生動物世界、珠山国家森林公園、膠南琅琊台観光地区、即墨温泉リゾート地、城陽宝竜広場、国際工芸品城などである。

図１　青島の位置

出所：http://qd.ifeng.com/special/qdkf/

３．青島南西にある膠南琅琊台

琅琊台は二千年前、古代の人が琅琊山の土を

使って台を作ったのである。周の時代初期、姜太公[4]が斉の国[5]を領有地にし、その後、八つの神様を作り、そのうち農業を司る「四時主神」が琅琊山の地域に命じた。越の国の王様勾践が琅琊山に「観台」を建設し、諸国の「国王」を会談し、さらに、台の東部には越国の方向に向き楼台「望越楼」を立てた。この「望越楼」の建設の目的が、越王が高い「望越楼」に登って、故郷の会稽を眺めるためである。

秦の始皇帝が史上初めて中国を統一した。史書の記録によると、秦の始皇帝が全国を統一してから、三回に渡り琅琊台に登った。初めて琅琊台に登った記録が琅琊台石碑の上に残る。「大楽之，留三月。乃徙黔首三万戸琅琊台下，复十二歳。作琅琊台，立石刻，頌秦德，明得意。」は秦の始皇帝が琅琊台に登った一回目の記録である。この石には当時の秦の始皇帝の様子を記録した（図２）。

図２　琅琊台遺跡

出所：http://qd.ifeng.com/qingdaoyinxiang/detail_2013_08/06/1072581_0. shtm

この石碑には86文字があり、書道の秦の時代の篆書名品として知られている。現在、現物が中国国家博物館に収蔵されている。

徐福が秦の時代の「方士」（陰陽師）という人物である。徐福が秦の始皇帝に懇願書を出し、秦の始皇帝のために、長生不老の薬がある東海にある仙人が住むところへ探しに行きたいという願いを出した。その後、秦の始皇帝の許可を得て、二回に渡り千人の少年（500人）、少女（500）を連れて琅琊台から出発した。

徐福が韓国の洛川島を経由し最後に日本に辿り着いた。徐福は日本各地で、当時中国の先進の農作業技術及び文化を日本人に教えた。徐福が日中交流の先祖であり、中国航海の第一人者である。

その後、各時代の名人が琅琊台に訪れた記録があった。唐時代の有名詩人李白、白楽天、蘇軾が琅琊台に登ったことがあった。琅琊台が中国の名所旧跡の一つとなった。

琅琊台は1982年に中国国務院により中国で第一回目の国家重点名勝風景地域[6]に指定された。1993年１月には「胶南市琅琊台風景名勝区管理所」が設置され、管理所がこの地域において山の管理、森林の面積を増やす作業を行い始めた。1994年10月、徐福殿という秦の時代風の建物を建てた後、第一段階の観光開発として、歴史と伝説による場所を再現するために足ふみ溝、雲梯、御道、望越楼、人物の彫刻、琅琊石碑、観龍台などの観光用の景観を建設した。観光地として、さらに観光資源と観光施設を増やすためにクジラ館、観龍閣、琅琊文化展示室、秦の時代の玄関のイメージとして秦闕、観龍亭、神泉、龍湾海水浴場を建設した。2008年に、中国の天文学会の専門家が調査した結果によると、琅琊台は中国では最も古い天文台遺跡であり、日の出や時間を測り、雲と気流の観察、天文の暦法、星占い、宗教政治などの分野

図３　琅琊台の位置

出所：http://www.qdqss.cn/

で効果を発揮したという（図３）。

2010年には中国国家観光局により国家の最高ランク（４Ａ）である名勝区域として認定された。名勝区委員会が直接管理する地域の総面積は1.98平方キロメートルで、関連全域の自然保全面積が5.88平方キロメートルにも及ぶ。

名勝区域では文化財が大量に発掘された。台を築くため各時代により建設された土の層も違う。各層の厚さは６ミリある。各時代の特徴が一目瞭然。管理区域では「千秋万歳」と呼ばれる秦の時代の瓦が発掘された。発掘された瓦は中国の「一級文物」（国家文化財）として認定された。景勝区域内の数か所から秦の時代前期の陶製の下水道を発見した。

琅琊台の南方の海入口の所には、千メートルの砂浜があり、現地の住民が「潮湾」と呼んでいる。地元の住民の話によると、ここはかつて徐福が造船する場であった。また、海岸の南西に琅琊台と潮湾の間には「胡家山」があり、山には石穴があり、伝説によると、秦の始皇帝の妹がここに建物を建て、住んだことがあったため、この場所を「皇女楼」と名付けられた。

胡家山の西方面には広さが数十平方メートルの海の湾があり、内側が昔の郡という地域につながり、港が深く、湾が広い。これは古代琅琊港のイメージあった。

古代琅琊港が春秋時代から秦・漢時代に渡り、ずっと中国の五大港の一つであった。琅琊港内には波がない、天然の良い港である。琅琊港が徐福の日本への出発地であり、「海洋文明」を開拓するための出発地である。

古代琅琊港の後ろ側には琅琊古城が立てられていた。琅琊古城が山の上にあり、黄海という海に面していて、西側が内陸につながっている。

琅琊は春秋時代にはすでに古代の斉国という地方の最大の港となり、軍事面では重用な役割を果たす要所となっている。

秦の始皇帝が中国統一を果たしてから、斉という地方に琅琊郡を設置され、その遺跡地が現在琅琊古城の所在地となっている。秦の時代には合計36の郡が設置し、そのうち琅琊郡が唯一の海に近い郡である。琅琊古城から海の上に遠く見える島が斉堂島である。歴史の伝説によると、秦の始皇帝が仙人を探すために滞在する場所が斉堂島である。その島の上に昔、「娘娘廟（女性神様を供える）」と呼ばれる寺院が現存、秦の始皇帝の母親がかつて住んでいた場所であった。現在、その寺院の建物自体がすでに崩壊している。

島内には甘い泉があり、場所は断崖の近くにある。秦の始皇帝の母親のかつての洗顔場所と言われる。

斉堂島は南島と北島に分かれている。二つの島が一本の細い砂丘でつながっている。北島は平坦地が多いために、現在400家族が北島で生活している。島民は主に漁業で生活を営んでいる。南島は海抜69メートルの小山である。岩石が多く、地形が険しい。しかし、南島は魚釣りの場所として人気がある。

そのほか、沐官島は琅琊此古港の西にある。資料によると、秦の始皇帝は仙人を探すために、この島に滞在し、さらに入浴した。この島には甘い泉があり、海に近く、潮が満ちると島自体が水面下に隠れるようになり、潮が引くと、島が水面下から出てくる。秦の始皇帝の入浴の遺跡と言われるところがまだ残っている。

昔、村が存在していたので、晴れた日には、村落の遺跡の輪郭が今でも見える。しかし、観光資源としての開発はまだ不十分である。

４．青島市を訪れる観光客の市場

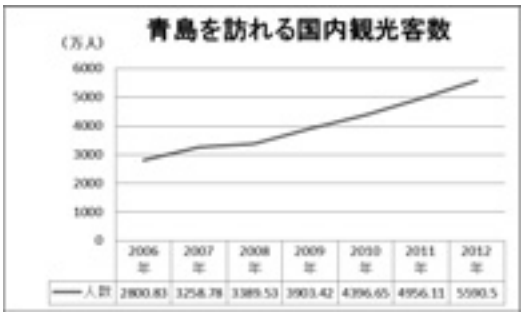
図３に示しているように、近年青島市を訪れる国内観光客の人数が順調に伸びていることが分かった。2012年国内客人数が2006年の2800万人から2012年の5590万人に増えた。2012年は2011年より12.8％増えた。

（１）県内の客が多い

青島を訪れる客の出身地を観察すると、県内の客が多い。来訪客全体の51％を占めている。北京、上海などの大都市からの客人数がそれぞれ７％と３％しかない（図４）。

（２）農村部の客が少ない

図３　青島を訪れる国内観光客数

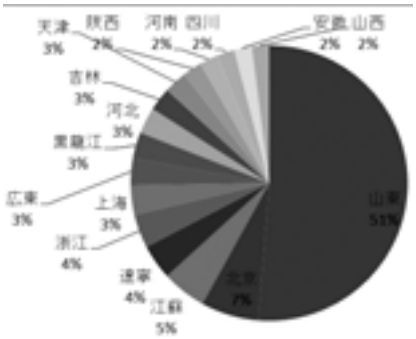


出所：『青島市観光統計年鑑2006年～2012年』

近年、青島を訪れる都市部の客が多く、農村部の客が少ないのが特徴である。都市部からの客の人数が来訪国内客数総数の87.41％を占める。収入面では農村部の人間が少ない、さらに、農村の人が観光にお金を使わない従来の消費方の影響により、農村部の人の観光客数が来訪国内観光客総数の12.59％しか占めていない。

しかし、近年、農村部の住民の生活が徐々に豊かになっているから、今後、農村部の住民が国内観光の成長が期待できる市場となる。「山東人が山東を観光」、「青島人が青島を観光」という、まず、地元及び周辺の在住民の観光需要を引き出すのが、政府側の最新観光宣伝誘致活動の動向である。農村部の住民に家から出てもらい、観光地へ来てもらうように、農村部の住民の生活スタイルを変化をさせ、国内観光市場の拡大に繋がるように期待している。農村部では「農村部の観光」「伝統祭り」という身近な観光に参加させ、彼らの観光消費を誘導し、国内需要の拡大に貢献したい。そのため、国内観光市場の拡大が期待できるようになる。

図４　青島を訪れる客の出身地別



出所：『青島市観光統計年鑑2012年』を参考により著者作成

５．琅琊台をめぐる観光開発課題

（１）琅琊台文化財としての保全と研究の不足

海の文化遺産として国内での認識度がまだ低い。青島市には28の海資源を研究する機関及び教育機関（大学）があり、20の国家専属の海資源の重要研究施設があるが、海に関する文化遺産の保全と活用に関する研究がほぼないのが現実である。そのために、海の文化遺産を保全するための研究が民間団体にしかない。

（２）琅琊文化に関する観光資源の開発不足

現在、琅琊台は海の文化遺産としての認識度が低い。琅琊台の歴史上を考察すると、古代の2000年以上前の西周時代から秦の始皇帝まで、さまざまな歴史の出来事がここで起こった。特によく知られた秦の始皇帝が不老長寿の薬を求めるために、徐福を東海の方へ派遣したことが、中国の海の文化を研究する時不可欠な資料となっている。

日本には徐福と関連する場所と記録が50数か所があるが、中国でまだ知られていない。日中観光を拡大するために今まで無視された観光資源となっている。琅琊台風景観光地内には琅琊文化の展示館がかつて建設されたが、徐福の「殿」という建物の内部の施設が老朽化している。日中間に良く知られる偉大な徐福に関する紹介及び展示品が貧弱と言える。

（３）遅怠するインフラ整備の建設

1982年に琅琊地域はすでに国家国務院による国家の重点自然風景区に指定されたが、12年後の1994年になってからやっと『青島琅琊台に関する自然風景名勝観光区域の観光開発企画』を発表、2006年に『青島琅琊台区コントロール的詳細企画』を制定した。秦の時代の「琅琊郡」と「琅琊港」の行政管理が現在の琅琊鎮政府となり、琅琊台自体が琅琊台「渡仮区」観光・長期滞在地管理委員会による行政管理の元になる。同じ地域内でも、複数の分野が違う行政部

門が別々に管理しているのが現状である。琅琊台の頂上まで水の供給がされず、現在のところ水道工事を行っていない。水を使用するには、高台の頂上まで給水車による給水を行っているのが現状で、トイレも少なく観光地としては、基本的な施設の建設が整備されておらず、そのために訪れる観光客数が少なく、観光スポットには成り得ていない。

5．終わりに

琅琊台が青島市の董家口経済区にある。董家口港及び港周辺産業区が青島の山東半島青い色琅経済区を建設するための五大核心区の一つである。将来、重要化学関連産業区の中心地、西海岸に現代風施設完備の最新港町を目指す地域でもある。琅琊台が唯一、董家口経済区のうちの歴史的元素がある地であるため、青い色文明を代表する海洋文化を生かす海洋歴史文化的な長期観光滞在「渡仮区」を建設するならば、最も適切な選択と考えられる。しかし、現段階では、周辺地域には観光客用の宿泊施設が建設されていないため、大量の観光客を受け入れる能力を持っていない。観光地においては宿泊施設の整備が遅れることは、観光客の誘致、滞在に影響する。この現状が琅琊台及び関連文化観光産業の展開を困難なものとさせている。

中国の都市観光は1980年代には北京、上海などの大都市に集中していた。現在は、各地方都市が近代都市建設により、都市観光が各地方や地域に変化した。地方都市の観光に周辺都市部からの客が多いのが特徴である。さらに、日帰り客が多く、宿泊客が少ない。都市観光では現代風の施設を大量に建設されていたが、全国の各地には類似するものが多い。観光客は地元と違う観光対象を求めるのが普通で、それが観光の目的でもある。

青島は中国のほかの地方都市と同じように、豪華な近代施設を多く建設したが、青島を訪れる観光客が従来の青島のイメージとは変わらないと感じている。都市観光が現代の都市建設だけでは、観光客の観光要求を満たすことができないのである。さらに歴史文化的な、現地固有の観光資源の発掘、それを生かすことが最も重要である。

琅琊台をめぐる古代歴史文化を観光資源として今後は、都市観光の再検討が必要となる。さらに、青島市が単純な海港都市から歴史文化の由諸がある観光都市への変身が必要となる。観光客の需要を研究した上で、都市観光の建設及び推進活動を展開すべきであろう。

参考資料

青島市政府編『青島市青い色経済発展企画案』2011年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2006」 2007年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2007」 2008年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2008」 2009年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2009」 2010年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2010」 2011年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2011」 2012年
青島観光局編「青島市旅遊統計年鑑2012」 2013年
青島市統計信息サイト
青島市統計局編「2012年青島市国民経済と社会発展統計報告」2012年
http://www.qdqss.cn/
http://qd.ifeng.com/fgqd/list_0/1.shtml
http://ja.wikipeedia.org/w/index.php
『三省堂　大辞林』

注

(1)秦の始皇帝（前259～前210）中国、秦の第一世皇帝（在位　前221～前210）。第31代秦王。名は政。紀元前221年戦国の六国を滅ぼし、初めて中国全土を統一、自ら皇帝と称した。郡県制を施行して中央集権化を図り、焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）による思想統制、度量衡・文字・貨幣の統一、万里の長城の増築などを行った。

(2)徐福（じょふく）とは、中国の秦朝（紀元前３世紀頃）の方士。斉国の琅邪の出身。別名は徐市（じょふつ）。子に福永・福万・徐仙・福寿がいるという。

(3)第11回目共産党代表大会
2012年２月10日～14日、青島市内で開催される。４年ごとに開かれる共産党員代表会議である。市内の政府機関及び各分野から選ばれた代表者が数百人参加した。市長が政府の仕事に関する「国作報告」の発表は会議の一つの内容である。

(4)姜太公　紀元前11世紀ごろに活躍した周の軍師、後に斉の始祖。姓は姜、氏は呂、字は子牙もしくは牙、諱は尚とされる。軍事長官である師の職に就いていたことから、「師尚父」とも呼ばれる。諡は太公。斉太公、姜太公の名でも呼ばれる。一般には太公望（たいこうぼう）という呼び名で知られ、釣りをしていた逸話から、日本ではしばしば釣り師の代名詞として使われる。

(5)斉の国　太公望によって立てられた国である。姓は姜（羌とするのは誤り）であるため、戦国時代の斉（田斉）などと区別して姜斉（きょうせい）とも呼ばれる。紀元前386年に家臣の田和によって乗っ取られ、姜斉はこの時点で滅ぼされた。首都は臨淄。

(6)国家重点名勝風景地域　風景名勝地域は重要な観光資源であると同時に、再生できない資源でもある。この再生できない資源を保全するために、中国政府国務院が３回にわたり（1982年11月、1988年８月、1994年１月）保全すべき地域である「国家重点風景名勝区」を発表した。